「原爆の図」に描かれた焼津と第五福竜丸

岡村幸宣

一　描かれた時間と描いた時間

一九五四年三月一日、太平洋ビキニ環礁における米軍の水爆実験によって、静岡県焼津市のマグロ漁船・第五福竜丸の乗組員二三人が被爆した。半年後の九月二三日には、そのうちのひとり、無線長の久保山愛吉が死亡した。この一連の事件は、原水爆のもたらす放射能被害について、社会的に大きな関心を呼び起こした。

一九五〇年から発表されていた丸木位里、赤松俊子（のち丸木俊）の共同制作「原爆の図」は、第七部《竹やぶ》の公開（一九五四年五月「第一回現代日本美術展」）を間近に控えていたが、広島・長崎に続く「第三の被爆」として日本の人びとに大きな影響を与えたこの事件、そして直後に広がった原水爆禁止運動に相対していくことになった。

一九五五年六月の「第三回ニッポン展」に発表された第九部《焼津》、一九五六年二月の「第九回日本アンデパンダン展」に発表された第一〇部《署名》は、広島の原爆被害――爆風、熱線による身体的損傷を描き続けた「原爆の図」連作において、一見、唐突な路線変更のように思える。

しかし、その直前の一九五五年二月、「第八回日本アンデパンダン展」で発表された第八部《救出》の左隻に、作者自身の姿も含めて後から救援活動に駆けつけた人びとの姿が描かれていることは、変化の予兆として注目したい。爆風、熱線の身体的損傷を描き続けた「原爆の図」において、入市被爆者――残留放射能の影響を受けた人たちが表象されるのは《救出》の左隻のみである。この絵がこの時期に構想されたことは、決して偶然ではないはずだ。《救出》は、一九四五年八月の広島の光景を描きつつ、一九五四年三月のビキニ事件以後の問題意識に立脚するという二重の構造をもつ絵画であったと考えられる。

一九五〇年にはじまった初期の「原爆の図」が、同時期の朝鮮戦争の影響を受けながら描かれたことは、これまでにもたびたび指摘されている。国内巡回展が盛んに行われた一九五〇年夏から五三年夏までの三年間は、ほぼそのまま朝鮮戦争の交戦期に重なる。

図１ 原爆の図第 9 部《焼津》（加筆前）1955 年

図２ 原爆の図第 9 部《焼津》（加筆後）

つまり「原爆の図」は当初から、一九四五年八月の広島を主題にして描きながらも、一九五〇年代という描かれた時代の社会の動向が反映された絵画だった。

絵画は、画面に表現された時間と、作者が描いた時間が、必ずしも一致するものではない。むしろ画面に描かれた時間と作者の描いている現実の時間のあいだには、多くの場合、必然的に差異が生じる。そして原爆の図第九部《焼津》は、一度発表したのちに加筆されるという事情によっても時間の差異が生じ、そのために複層的な時代背景を反映した絵画になっているのである。

二　一九五五年――焼津を描く

第九部《焼津》は、ほかの「原爆の図」と比べて、作者自身の言及は決して多くない。そのなかでは、俊の著書『幽霊　原爆の図世界巡礼』（朝日新聞社、一九七二年）における次の回想が、もっとも詳しい。

九部は「焼津」という題です。ビキニで水爆の実験があり、日本人漁夫が死の灰を浴び、そのなかの一人、久保山愛吉さんが亡くなりました。わたしたちは、幾度か、焼津港をたずねました。富士を背に、静かな入江の焼津港に、そんな不幸がおとずれたとも思えぬ、温暖な豊かな漁港でした。

わたしたちは、さっそうとしたゴム長靴スタイルの女たちを、はげしい思いの母と子を描きました。魚河岸のいさまし

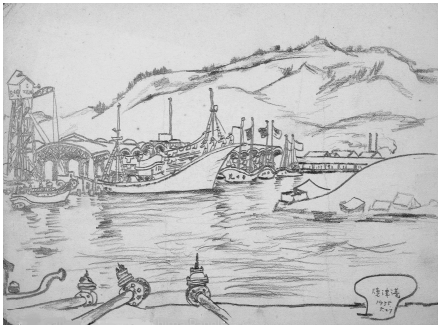

図３ 俊スケッチ No.324 焼津港

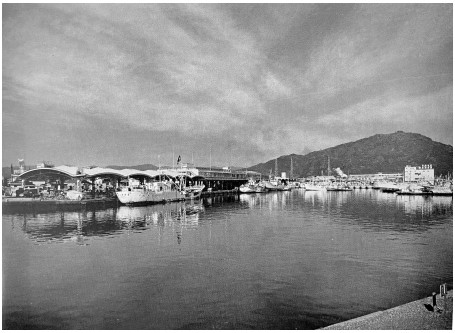

図４ 旧焼津港（『焼津漁業史』より）

いにいさんに来ていただいて、はちまき姿の働く若者を描きました。みんな並んで、怒りの目ではるかビキニを眺め、悲しみと不安の福竜丸の帰りを待つ群像としたのです。半分には富士と、太平洋を描きました。富士を描いてみて、どうも落ちつきがわるいのです。日本の山、富士は、わが民族の誇り、ということになっているのです。美しい山なのですのに妙な思いが残るのです。日の丸と同じように、天皇と同じように、富士をかかげて侵略戦争をやらされた、虐殺の言いわけに富士を讃美した。山には罪がないでしょうに。

あとになってから、焼津に描き込んだ富士を消して、福竜丸を描きました。それでも、なんとなく落ちつきのわるいような作品です。（中略）被爆した、やられたのだ、というばかりではいけない。怒りを描かねば、抵抗を描かねば、と思ったのですが、思いの方が先に走って、筆がついていかなかったのでしょうか。

この回想にあるように、当初《焼津》には、右隻に富士山と海が、左隻に「福竜丸の帰りを待つ群像」が描かれた（図1）。しかし、現在の《焼津》は、当初は一九名だった群像が四三名と二倍以上の人数に増え、富士山ではなく第五福竜丸の船影が幻のように宙に浮かんでいる（図2）。加筆の理由について小沢節子は、「この絵の富士山は、一九五五年当時の丸木夫妻の、そしてこの絵を原水爆禁止を訴える平和の施設として世界に向けて送り出そうとした人びとのナショナルな心情を体現し、そして、そうした心情に対する外部からの批判と作者自身の反省によって絵のなかから消されたのである」（『「原爆の図」描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』、岩波書店、二〇〇二年）と指摘している。実際、同時代の評論において、この作品について積極的に評価した例はほぼ見当たらない。そして作者自身も決して満足できる絵画でなかったことは、後に一時的に画集から削除されたことからも窺える。

当時の位里と俊は、「原爆の図」を発表して全国巡回展を成功させ、一九五三年からは初期三部作の海外巡回もはじまっていた。隆盛しつつあった原水爆禁止運動を芸術家として背負う立場だという自覚を、とりわけ俊は強くもっていただろう。

作品の舞台となった焼津への訪問について、俊は「わたした

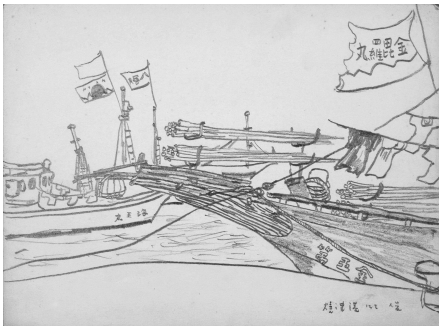

図５ 俊スケッチ No.325 焼津港にて

図６ 俊スケッチ No.326 焼津港

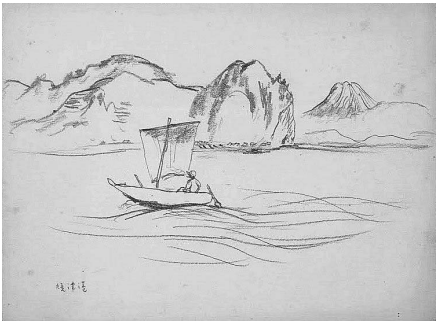

図７ 俊スケッチ No.327 焼津港

図８ 焼津新港より 2022 年 11 月撮影

ちは、幾度か、焼津港をたずねました」と記しているが、『丸木位里画文集　流々遍歴』（岩波書店、一九八八年）で位里は焼津について一切触れておらず、初めて焼津を訪れたのがいつだったか、「幾度か」の訪問が実際に何度だったのかは、現時点で確認できない。

ただし、俊が生涯に残した一〇〇〇点を超えるスケッチは遺族の丸木ひさ子のもとに現存し、そのなかに、一九五五年五月に焼津を描いた六点の鉛筆スケッチが確認できる。

俊のスケッチには通し番号がつけられている。３２４番のスケッチ（図３）は、当時の焼津港の第一船渠西岸壁を描いており、右下に「焼津港　１９５５・５・２７」という書き込みがある。停泊する漁船の奥には、一九五四年六月に完成したばかりの、かまぼこ型の屋根が特徴的な魚市場が見え、左端には一九五三年一〇月完成の砕氷塔も描かれている。魚市場は老朽化のため二〇〇七年に解体されて新港へ移転したが、『焼津漁業史』（焼津漁業協同組合、一九六四年、非売）に掲載された昔の魚市場の写真（図４）は、俊のスケッチとほぼ同じ角度から撮影されていて、往時の様子をうかがい知ることができる。

３２５番のスケッチ（図５）には「焼津港にて」という書きこみがあり、金毘羅丸、海王丸という文字の見える漁船が描かれている。

３２６番のスケッチ（図６）には、くつろいだ表情の四人の若い漁師が船上に描かれている。「焼津港　洗たく日和」という書き込みがあるとおり、左側に立っているふたりの漁師は洗濯

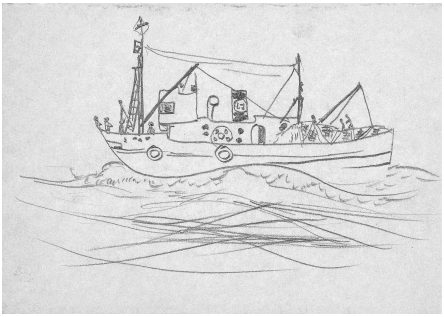

図９ 俊スケッチ No.328

図10 俊スケッチ No.329 焼津魚市場

ものを干しているところだろう。３２７番のスケッチ（図７）は、海上に浮かぶ帆つきの小舟が描かれており、「焼津港」と書き込みがある。小舟の背後に見えるのは、焼津の漁師の信仰の対象としてシンボル的な存在である当目山（虚空蔵山）で、山麓には小さく漁村（久保山の生家や、彼の墓碑の建つ弘徳院のある浜当目）の集落も描かれている。右手には伊豆半島の山なみを臨み、その先の雲の向こうには富士山が姿をあらわしている。ただし、旧焼津港から富士山を見ようとすると、当目山など近くの山の影に隠れてしまい、このスケッチのように山裾まで見ることはできない。海岸線に沿って南へ移動し、当目山の右側に富士山が現れる角度に立つには、現在の新港（一九五五年当時は浜であり、後に埋め立てられた）の位置まで数百メートルほど移動しなければならない（図８）。

３２８番のスケッチ（図９）は海を行く漁船が描かれている。３２９番のスケッチ（図10）には、３２４番とは異なる角度から第一船渠西岸壁の魚市場と砕氷塔が描かれ、裏面に「焼津魚市場」との書き込みがある。

いずれも丹念なスケッチであり、初めて焼津を訪問した新鮮さが現れているのではないかと推測したくなるが、スケッチの日付は一九五五年六月一二日に原爆の図第九部《焼津》が発表される直前だ。そして《焼津》に描かれた漁師たちの姿はスケッチに見られない。《焼津》の群像のなかには位里の母である丸木スマをモデルにした女性像（左端から二人目）も含まれているので、当時、東京・練馬区にあった位里と俊のアトリエで、身近な人たちを中心に、築地などの「魚河岸のいさましいにいさん」の協力を得て描かれた可能性もある。

また、加筆前の《焼津》の右隻に描かれたような、富士山が単独で空にそびえる雄大な風景を見るためには、焼津港から南へ三キロメートルほど離れた小川港よりさらに南の石津浜の周辺まで移動する必要がある。俊は「太平洋」と書いているが正確には駿河湾の対岸に、伊豆半島の山なみが見え、その上に富士山が雲間から頭をのぞかせる。

つまり《焼津》に描かれた富士山と海の風景は、広い意味での焼津の象徴的な風景かもしれないが、焼津港から直接見える風景とは言えないのだ。あらためて《焼津》の画面を確認すると、焼津港を実際に訪れなければ見られない描写は存在しない

ことに気づく。位里と俊が《焼津》を描く前に実際に焼津港を取材したかどうかは不明だが、少なくとも焼津港を訪れなくても描けた絵画だとは考えられる。

二　一九七〇年――第五福竜丸を描く

加筆前の《焼津》は、一九五九年に虹書房から刊行された画集『原爆の図』に参考図版として掲載されたが、同年発行された中国版の画集『日本画家丸木位里・赤松俊子作品選集』（李平凡編、人民美術出版社）には四三人に加筆された左隻のみが掲載されている。また、一九六七年に田園書房から刊行された画集『原爆の図』には「作者の強い希望により」掲載を見送られている。同じ経緯をたどった《署名》とともに現在の姿の《焼津》が、ほかの「原爆の図」と同じ扱いで画集に掲載されたのは、一九七二年の新潟ＢＳＮ美術館「原爆の図展」のために発行された『原爆の図』画集である。

図11 第五福竜丸展示館の展示風景

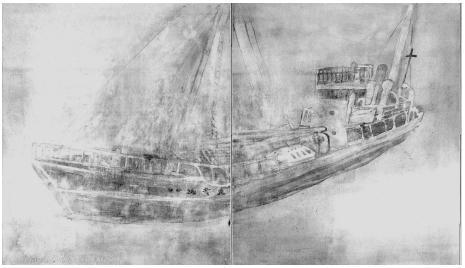

図12 第9部《焼津》 に描かれた第五福竜丸

こうした履歴から推考すると、《焼津》の右隻は一九七〇年前後に決定的な加筆がなされた可能性がある。そしてそれは、一九六八年三月一〇日の朝日新聞「声」欄に、「沈めてよいか第五福竜丸」という武藤宏一による投書が掲載され、東京・江東区のごみ処分場だった「夢の島」の埋立地の海で廃船となって放置されていた第五福竜丸の存在が再び注目されはじめたタイミングとも一致する。一九六九年に立ち上がった第五福竜丸の保存運動は、一九七六年の都立第五福竜丸展示館の開館へと結実する。この時期に《焼津》に第五福竜丸の船影が加筆されたのは、こうした社会の動きへの応答といえよう。

《焼津》の右隻に描かれた第五福竜丸の船影が、観る者に不自然な印象をもたらすことにも注目したい。もし地面あるいは水面から空に浮遊する船を見るならば、見上げる角度になるはずである。それがどのように見えるかは、現在の第五福竜丸展示館で船体を見上げればイメージできる（図11）。しかし、実際の絵は、船が空に浮いているにもかかわらず、見下ろす角度で描写されているため、視線がちぐはぐに感じられる（図12）。おそらく船のイメージは、東京湾に放置され、沈みかけた姿をスケッチしたか、写真をもとに描いているのだろう（図13）。

位里と俊はもともと《焼津》のできに納得していなかったが、第五福竜丸の存在が再発見されたことを機に、その船影を上描

きしたのは、「原爆の図」として《焼津》を意味づけなおす行為でもあったのかもしれない。

加筆の時期を示す絵画の痕跡は、もうひとつある。第五福竜丸は被爆後、東京水産大学（現・東京海洋大学）の練習船となって「はやぶさ丸」と名を改められた。東京湾で再発見された際、当初は船体に「はやぶさ丸」と記されており（図14）、一九七〇年二月二一日に船名を第五福竜丸に書き直す刻銘式が行われた。そのとき、いったん新字の常用漢字「竜」が記され、後にもとの船と同じ旧字体「龍」に改められた。そして、位里と俊が《焼津》に描いた第五福竜丸を見ると、船体には新字の「竜」が記されている。

第五福竜丸に「竜」の字が記されていた時期は長くないから、《焼津》の加筆は、刻銘式と同時期であった可能性が高く、加筆は一九七〇年頃だったと推測できる。

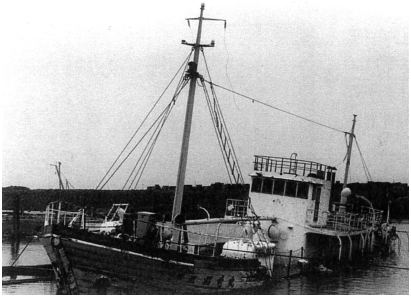

図13 刻銘式後の「第五福竜丸」1970年

図14 「はやぶさ丸」1968年頃

当時は一九六四年の原水爆禁止運動の分裂の記憶が生々しく残されていた。そのため第五福竜丸の保存運動は、中野好夫、三宅泰雄、檜山義夫、鈴木正久、壬生照順、畑中政春、森滝市郎、美濃部亮吉という肩書なしの個人の八名によって、特定の団体ではなく幅広く呼びかけられた。位里と俊は直接運動には関わらなかったが、第五福竜丸の船影を《焼津》の画面に加筆し、保存運動の記録を絵画に残した。

《焼津》の画面には、一九五四年のビキニ事件を主題にして、事件直後の人びとの不安や怒りを描いただけではなく、第五福竜丸という船の保存の重要性が社会に認識されていく一九七〇年前後の時間も重ねられた。広島で原爆ドームの保存が正式に決議されたのは一九六六年のことだ。そして「原爆の図」を保存展示するための場である原爆の図丸木美術館が開館したのも、一九六七年だった。一九六〇年代後半から七〇年代にかけては、ヒトの語る記憶とともに、モノが伝える記憶を保存する方向へ、社会の関心が移りはじめた時期でもある。《焼津》の画面に流れる複数の時間からは、そうした時代の変遷を読みとることができるのである。

図11の画像は第五福竜丸展示館ウェブサイトより

図13、14の画像は『第五福竜丸は航海中　ビキニ水爆被災事件と被ばく漁船60年の記録』（公益財団法人第五福竜丸平和協会編・発行、二〇一四年）より